

こども病院ひるば

編集 医療サービス・広報委員会 〒420-8660 静岡市葵区漆山 860 TEL: 054-247-6251(代表) FAX: 054-247-6259

副院長あいさつ

未来の子ども達のために

副院長兼臨床研究支援センター長兼
小児がんセンター長兼小児がん相談室長兼
臨床研究室長兼血液腫瘍科長

渡邊 健一郎

この度、副院長を拝命しました渡邊健一郎と申します。小児医療をリードする当院の幹部職を勤めさせていただくことは、大変光栄なことですが、同時に責任の重さを痛感しております。

さて、私が小児科医になって早30年経ちますが、その間に小児医療は大きく進歩しました。以前、入院患者の多くを占めていた、肺炎や髄膜炎などの感染症、気管支喘息といった疾患も、予防接種の普及や治療の最適化により減少あるいは外来治療が可能な疾患となりました。

私が専門とする小児がんも、かつては不治の病でしたが、今ではその多くが治癒を期待できる疾患となっています。さらに、ゲノム医療や再生医療が臨床に導入されてきており、今まで治療が困難であった難病にも新たな治療が生まれてきています。

このような進歩は不断の臨床研究の成果であり、未来の子ども達のためにも、当院はその一翼を担うことが期待されています。

一方で、高度化した治療を適切に適用するには、その意義を深く理解する必要があり、それを支える横断的な診療科や部署の役割が重要となります。また、治療の選択肢が増えることは良いことですが、意思決定の支援や倫理的な問題に取り組む職種や組織も求められています。

そして何より子ども達が自分らしく充実した人生を歩むことができることが最も大事なことです。治療が良くなるということは、病気を克服して、あるいは病気と共に成人期を迎える患者さんが多くなるということです。

子どもは未来の大人ですから、短期的な予後と同時に、長期的な視点に立って治療やケアの体制を整備する必要があります。

以上のように、小児医療に求められる「質」は今まで以上に高くなっていると言えます。しかし、周産期から青年期という人生の中で最も変化が激しく重要な時期を扱うには、従来の成人中心の医療の仕組みや発想だけでは十分とは言えません。「少子化」により子どもの数は減るのは事実ですが、小児病院の役割はかつてないほど大きくなっていると感じています。

当院が小児専門病院として、子ども達が最高の医療やケアの恩恵を受けられるように微力ながら努めて参る所存です。開院以来尽力されてきた職員の皆様に心から敬意を表し、また当院を支援していただいている多くの方々に深謝すると共に、今後もしばらくご支援賜りますようお願いして就任の挨拶といたします。



新任科長あいさつ

総合診療科 山内 豊浩

私は幼少期を静岡県で過ごしました。その静岡県のこども病院で小児科医として研修をはじめ、気がつけば19年が経ちました。

臓器別の専門科が集まる当院において、私たちは疾患や臓器にとらわれず総合的にこどもを診ることを大切にしています。各々得意分野が違いますが、それを強みにして、「総合診療科があってよかった」と思ってもらえるような診療科でありたいと思っています。スタッフ一同、これからもよろしく願いいたします。



内分泌科 上松 あゆ美

開院以来親まれてきました「内分泌代謝科」は、2022年4月1日から、「内分泌科」と「糖尿病・代謝科」に分かれました。「内分泌科」では、成長障害（低身長・高身長）・甲状腺疾患（バセドウ病・橋本病などの甲状腺機能低下症等）や思春期に関連する症例（思春期早発症や思春期遅発症・性腺機能低下症）・副腎疾患等の内分泌疾患一般を担当させていただきます。



糖尿病・代謝科 佐野 伸一郎

2022年4月に糖尿病・代謝内科を開設しました。糖尿病診療は医療機器進歩が目覚ましくDX時代を迎えています。当科ではインスリンポンプ、24時間持続血糖モニタリング、オンライン診療を用いエビデンスに基づいた診療を提供しています。更に当科は『静岡県小児医療最後の砦』の一員として、全ての小児内分泌代謝疾患（成長障害、性分化疾患、骨系統疾患等）に対しても遺伝学的診断を含めた最善・最新の診療を提供していきます。詳細は当科HPをご覧ください。



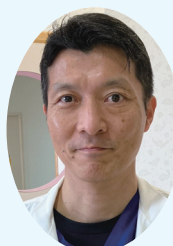
小児外科 福本 弘二

4月から漆原直人先生の後を引き継ぎ、小児外科の科長を務めさせて頂いております福本弘二と申します。ここ数年で科内での世代交代を進めておりましたので、当院での小児外科診療はこれまで通り、鼠径ヘルニアや虫垂炎といったよく見られる疾患から希少疾患まで、すべての小児外科疾患に対応致します。お問い合わせや緊急症例にはいつでも対応できますので、外科疾患を疑った段階で、お気軽にご相談頂ければ幸いです。今後とも宜しく願い申し上げます。



脳神経外科 石崎 竜司

脳神経外科の科長となりました石崎竜司です。当科では、脳腫瘍は、ナビゲーションを使用した安全な摘出を行い、内視鏡治療では、軟性鏡、硬性鏡を駆使して他院で対応困難となった症例も積極的に治療しています。頭蓋縫合早期癒合には、形成外科と共にMCDO法という新しい治療法を行っています。今後も、小児脳神経外科医として心を込めて精一杯治療し、子供達の成長にも寄り添っていく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。



歯科 渡邊 桂太

令和4年4月より歯科科長を拝命しました渡邊桂太と申します。平成24年4月より前科長加藤光剛先生のもとで働いておりました。当科の理念である病気や障害をもったこども達を含め、すべてのこども達がよりよく発育・発達・生活できるよう口の健康を通して支援することを継続して実践できるよう努力していく所存です。至らぬ点が多々あると思いますが、丁寧に日々の診療にあたっていきます。よろしくお願い致します。





お世話になりました



○令和3年度末常勤医師退職者（6名）

漆畑直人（副院長）、石垣ちぐさ（こころの診療科）、小幡勇（整形外科）、
加藤光剛（歯科）、南波美沙（産科）、山手和智（小児集中治療科）



看護部新入職者紹介



今年度、看護部は新たに19人の仲間を迎えました。

新入職看護師はこども病院で働くことの喜びと期待、不安を抱えています。

フレッシュな感性を磨き、看護実践力向上に努めています。

成長を温かく見守り、ご支援くださることをお願いいたします。



最近の話題 ～難治性アトピー性皮膚炎への新しい治療～

免疫アレルギー科長 目黒 敬章



免疫アレルギー科では、アレルギー疾患、免疫疾患の診療を行っています。アレルギー疾患としては食物アレルギーの患者様が最も多いのですが、他にもアトピー性皮膚炎、気管支喘息、アレルギー性鼻炎の診療も行っていきます。本日は、その中からアトピー性皮膚炎についての最近の話題に触れてみたいと思います。

「アレルギーマーチ」という言葉を聞かれたことがある方は多いのではないかと思います。アレルギー素因のある子どもが、成長とともに異

なるアレルギー疾患を次々に発症するという現象をマーチにたとえた表現です。

アトピー性皮膚炎（あるいは乳児湿疹）から始まり、食物アレルギー、気管支喘息、アレルギー性鼻炎などを合併してくるという状態を指します。これはあくまでも経験的に知られていた現象ですが、免疫学の進歩に伴い、炎症のある皮膚におけるハウスダストや食物抗原への感作（経皮感作）がTh2型の免疫反応を引き起こし、アレルギー疾患を発症してくるという機序が明らかになってきました。

このため、近年では食物アレルギーや気管支喘息の発症予防という観点からも、皮膚炎をコントロールすることの重要性が改めてクローズアップされてきています。

治療の実際

アトピー性皮膚炎の治療においては保湿を含めたスキンケア、および抗炎症作用のある薬剤の使用が基本となりますが、「有効性についてのエビデンスがある抗炎症薬がステロイド外用薬のみ」という状況が長らく続いていました。

この状況が変わってきたのは2000年前後からです。1999年のタクロリムス軟膏発売を契機に、免疫抑制薬や分子標的薬といった新しい作用機序の薬剤が増えてきました。特に分子標的薬の進歩は目覚ましく、生物学的製剤（モノクローナル抗体）およびJAK阻害薬が次々と登場しています。表1に示し、以下で詳述します。

生物学的製剤はサイトカイン（あるいはその受容体）などに結合し作用を阻害する抗体です。アトピー性皮膚炎に適応のあるものは現在デュピルマブ（デュピクセント®）のみですが、残念ながら現時点では15歳未満の小児では適応はありません。デュピルマブはIL-4受容体 α 鎖に結合する抗体です。IL-4およびIL-13の作用を阻害することにより効果を発揮します。

また、現在開発中の薬剤としてネモリズマブがあります。こちらは痒みに関与するとされる IL-31 を阻害する薬剤です。13歳以上の小児に対しても治験が行われ、有効性が報告されています。JAK 阻害薬はサイトカインの受容体から細胞内へシグナルを伝達する重要な分子である JAK（ヤヌスキナーゼ）を阻害します。生物学的製剤に匹敵する抗炎症作用を持ち、以前からリウマチや炎症性腸疾患などの治療に用いられてきましたが、アトピー性皮膚炎の治療にも取り入れられつつあります。

小児適応のあるものとしてはデルゴシチニブ軟膏（コレクチム®軟膏）、およびウパダシチニブ（リンヴォック®）錠があり、デルゴシチニブ軟膏は2歳以上の小児、ウパダシチニブ錠は12歳以上（かつ体重30kg以上）の小児に適応となっています。デルゴシチニブ軟膏はミディウム～ストロングクラスのステロイド外用薬と同等の抗炎症作用があるとされます。タクロリムス軟膏と異なり皮膚の灼熱感がなく、個人的には使いやすい薬剤であると感じています。

一方、ウパダシチニブなどの内服 JAK 阻害薬は幅広いサイトカインを阻害し抗炎症作用が強いため、有効性は高いのですが易感染性などの副作用に注意する必要があります。あらかじめ感染症のスクリーニングを行い、投与開始後も感染症状に注意しながら投与します。また、内服中は生ワクチンの接種は禁忌となっている点にも注意が必要です。

表1 新しい作用機序の薬剤

	薬剤名	作用・効用
生物学的製剤	デュピルマブ	15歳未満小児適応ではない IL-4受容体α鎖に結合する抗体であり、IL-4 および IL-13の作用を阻害することにより効果を発揮する
	ネモリズマブ	かゆみに関与するとされる IL-31 を阻害する薬剤 13歳以上の小児に対しても治験が行われ有効性の報告がされている
JAK 阻害薬	ウパダシチニブ錠剤	サイトカインの受容体から細胞内へのシグナルを伝達する重要な分子である JAK（ヤヌスキナーゼ）を阻害する 生物学的製剤に匹敵する抗炎症作用を持ち、リウマチや炎症性腸疾患などの治療に用いられてきたが、アトピー性皮膚炎の治療に取り入れられつつある 12歳以上（かつ体重30kg以上）の小児に適応する 幅広いサイトカインを阻害し抗炎症作用が強いため有効性は高いが易感染性などの副作用に注意が必要である。あらかじめ感染症のスクリーニングを行い、投与開始直後も感染症状に注意しながら投与する。内服中は生ワクチンの接種は禁忌である
	デルゴシチニブ軟膏	作用機序はウパダシチニブと同様 2歳以上の小児に使用できる ミディウム～ストロングクラスのステロイド外用薬と同等の抗炎症作用があるとされるが、タクロリムス軟膏と異なり皮膚の灼熱感がない

当院においては一般の診療所等では投与しにくいウパダシチニブ（リンヴォック®）錠などの薬剤も実際の診療に導入し、高い効果を実感しております。適応はステロイド外用療法をしっかり行っても改善が乏しい場合、あるいはステロイド外用薬の副作用が問題となっており継続が困難である場合となります。

12歳以上（体重30kg以上）で上記の条件に当てはまる難治性アトピー性皮膚炎の患者様がおられましたら、お気軽にご相談ください。

組織改正・人事異動情報

令和4年4月の人事異動により、職員の採用・退職・転入・転出がありました。

役職別主要一覧 変更箇所は赤字になっております。

R 4.4.1 現在

役 職	氏 名	役 職	氏 名	役 職	氏 名
院長	坂本 喜三郎	移植センター長	北山 浩嗣	【診療科長】	
副院長	田中 靖彦	輸血・細胞治療センター長	堀越 泰雄	総合診療科長	山内 豊浩
副院長	猪飼 秋夫	小児がんセンター長	渡邊 健一郎	小児感染症科長	荘司 貴代
副院長	河村 秀樹	ゲノム医療センター長	清水 健司	小児内科長	勝又 元
副院長	渡邊 健一郎	IVRセンター長	金 成海	小児救急科長	唐木 克二
医療安全部長	田中 靖彦	エコーセンター長	新居 正基	集中治療科	川崎 達也
医療連携部長	猪飼 秋夫	【室長】		腎臓内科長	北山 浩嗣
情報管理部長	河村 秀樹	医療安全管理室長	田代 弦	神経科長	松林 朋子
救急総合診療・地域医療部長	河村 秀樹	医療品質向上室長	田代 弦	免疫アレルギー科長	目黒 敬章
器官病態系内科診療部長	渡邊 健一郎	感染対策室長	荘司 貴代	内分泌科長	上松 あゆ美
外科系診療部長	奥山 克己	地域医療連携室長	北山 浩嗣	糖尿病・代謝内科長	佐野 伸一朗
移植再生医療部長	渡邊 健一郎	育児環境支援室長	田代 弦	臨床検査科長	河村 秀樹
こころの診療部長	大石 聡	入退院支援室長	河村 秀樹	血液凝固科長	堀越 泰雄
手術・材料部長	奥山 克己	総合医療相談室長	北山 浩嗣	産科長	河村 隆一
放射線診療部長	小山 雅司	小児がん相談室長	渡邊 健一郎	新生児科長	中野 玲二
診療支援部長	田代 弦	ボランティア活動支援室長	上松 あゆ美	循環器科長	田中 靖彦
事務部長	山本 智ひろ	褥瘡対策室長	加持 秀明	不整脈内科長	芳本 潤
看護部長	美濃部 晴美	栄養サポート室長	福本 弘二	心臓血管外科長	猪飼 秋夫
【センター長】		国際交流室	坂本 喜三郎	小児外科長	福本 弘二
患者相談センター長	目黒 敬章	臨床研究室長	渡邊 健一郎	消化器外科長	福本 弘二
チーム医療推進センター長	田代 弦	治験管理室長	青島 広明	呼吸器外科長	福本 弘二
移行期医療支援センター長	猪飼 秋夫	研究支援室長	広瀬 圭一	脳神経外科長	石崎 竜二
臨床研究支援センター長	渡邊 健一郎	診療情報管理室長	河村 秀樹	整形外科長	滝川 一晴
研修推進センター長	松林 朋子	診療画像管理室長	小山 雅司	形成外科長	加持 秀明
予防接種センター長	松林 朋子	ITシステム管理室長	芳本 潤	耳鼻いんこう科長	橋本 亜矢子
総合診療センター長	山内 豊浩	臨床工学室	福本 弘二	泌尿器科長	濱野 敦
小児救急医療センター長	唐木 克二	中央滅菌材料室	田代 弦	歯科長	渡邊 桂太
成人移行・診療センター長	満下 紀恵	放射線技術室	梅田 聡志	病理診断科長	岩淵 英人
集中治療センター長	川崎 達也	検査技術室	神園 万寿代	リハビリテーション科長	真野 浩志
血友病診療センター長	小倉 妙美	輸血管理室	堀越 泰雄	血液腫瘍科長	渡邊 健一郎
周産期母子センター長	中野 玲二	成育支援室	溝渕 雅巳	遺伝染色科長	清水 健司
循環器センター長	田中 靖彦	リハビリテーション室	真野 浩志	発達小児科長	溝渕 雅巳
脊椎診療センター長	滝川 一晴	心理療法室	大石 聡	こころの診療科長	大石 聡
頭蓋顔面・口蓋裂センター長	加持 秀明	栄養管理室	鈴木 恭子	麻酔科長	奥山 克己
リハビリテーションセンター長	真野 浩志	薬剤室	井原 摂子	放射線科長	小山 雅司

★ホームページ

様々な情報の発信や内容の充実につとめています。
お知らせは定期的に更新しています。是非ご覧ください。

こちらからアクセス →



静岡県立こども病院QRコード



編集後記

本年度もよろしく申し上げます。

編集室：河村秀樹、望月美貴子、野中幸子